

## 学会印象記

## SGI 2007 学会報告

総合大雄会病院IVRセンター, 四天王寺病院 放射線科 打田日出夫

## SGI 2007 : The Inaugural Meeting of the Society of Gastrointestinal Intervention

## The Cutting Edge of Gastrointestinal Stenting

平成19年11月2～3日(金・土曜), 韓国ソウルのAsan Medical Center (Ulsan医科大学) 講堂に於いて開催された表記の第一回消化器IVR学会に参加し, 強いインパクトを受けたので, その概要を報告する。

CVIR代表の一人であるAndy Adamを会長として, 本領域で国際的に活躍している韓国Asan Medical CenterのHo-Young Songが中心となって企画した国際学会である。欧米アジア諸国からAdam (UK), Strecker (Germany), Maynar (Spain), Cwikiel, Kandarpa, Mueller (USA)らの著名なIVRistに加えて内視鏡IV専門医が参加し, 想像していた以上に質が高く活気に溢れていた。15ヶ国から出席者総数は515名で, 8割以上が韓国からの参加であり韓国若手IVRistの質の高さと活力を見せつけられた感が強い。日本からの参加は消化器内科, 放射線科から共に5～6名であり少なかった。講演と討論は, 韓国, 欧州, USAの医師が中心であったが, 日本からは消化器内科医3人との放射線科医1人が講演者に推挙されていた。

食道, 胃～十二指腸, 大腸, 胆道のステント治療に焦点が当てられ, 以下の6つのセッションから構成されたプログラムのテーマについて, 内視鏡とステントを専門とする消化器内科医とIVRistが一堂に会して, 講演後にパネル討論が行われた。

I. Esophageal Intervention 7演題; 頸部を含む高位食道や食道・胃接合部狭窄治療に於けるステントの役割と留意点など。II. Gastroduodenal Intervention (I) 5題; 胃・十二指腸閉塞へのステント治療など。III. Gastroduodenal Intervention (II) 5題; 前谷(東邦大学大橋メディカルセンター)は「Treatment of Recurrent Cancer after Gastric Surgery」について講演, 他に良性狭窄へのステ

ントやカバースtentなど。IV. Colorectal Intervention 6題; 直腸を主とする大腸狭窄へのステント治療など。V. Biliary Intervention (I) : Malignant Strictures 7題; 吉川(奈良医大)は「Percutaneous approach malignant hilar obstruction : Japanese Experiences」について, 花田(尾道総合病院内視鏡センター)は「Clinical and histopathological findings in autopsy cases with inoperable malignant biliary obstruction treated with various biliary stents」について講演。VI. Pancreatic and Biliary Intervention (II) : Benign Strictures 6題; 伊佐山(東京大学 消化器内科)は「Endoscopic management : the role plastic stents」, 五十嵐(東邦大学大森メディカルセンター)は「Pancreatic stenting for pancreatic duct stenosis : Japanese Experiences」について講演。

Luncheon Sessionでは「Useful English Expression in the Podium」のタイトルで, ポスター, 講演, 司会のポイントについて, また, 最後のPlenary Lectureでは, IVRと内視鏡IVの将来に関する講演並びにSongによる「Invention : a step toward the future」の講演があり, 彼は世界共通語としての英語の重要性を強調した。日本におけるIVRの発展と英語による国際的交流の将来について, 刺激され考えさせられる機会となった。

ポスターセッションではステントを主とした多岐に亘る演題が提示され, 韓国からの出題が大多数でその質の高さに感銘した。日本からは3題(三重大学放射線科; 高木, 山門らと四天王寺病院放射線科; 穴井ら, 京都第二日赤消化器内科; 安田ら)のみであった。世界的には放射線科医(IVRist)が胆道IVRをステントも含めて施行しているが, 日本では事情が異なり内視鏡的と経皮的の両者共に消化器内科医によって行われていることが, 内科医から紹介された。この領域にも情熱を持ち胆道ステントを最初に導入した一人として, 少し残念な気持ちになった。日本でも胆道IVRを一部の施設ではIVRistが積極的に行っているため, 今後は

相互の連携と協力により, 胆道領域のIVRにタッチするIVRistを増やしたいものである。

韓国が本領域で世界をリードしつつあるのは, 自国製の質の高いステントが製造・販売され医師のアイディアと希望を迅速に新製品の開発に導入できる環境が作られていることである。現在5社が競ってステント開発に参入, その中で先端を走っているTaeWoong Medicalは食道ステントについてはUSAでFDAの承認を取得, 十二指腸, 大腸等の消化管ステントや胆道カバースtentはヨーロッパでCマークを取得し, 販売を行っている。日本への導入を某企業が計画しているとのことである。

日本も質の良いステントは速やかに正式に導入する方針を立てなければ, 本領域の医療が遅れることが危惧される。

食道を含む新しい消化管ステンの導入と普及には, 厚生労働省管轄PMDA審査部の認可を取得した後に保険収載されることが必要である。しかし, 正規な導入とPMDAの認可取得には多くの難関がある。各科の壁を超えて医師(関係学会と研究会)と企業が協力することが大切で, 以下の点について, 企業, 学会, 研究会の協力により調査し, 現況と将来展望を明確にすることが先決であると考えてるので, 参考にして頂きたい。

- 1) 消化管ステントの対象臓器(胃～十二指腸, 大腸など), 疾患・病態(悪性腫瘍による狭窄など)
- 2) 臨床的有用性(手術不能による姑息的治療, 手術までの緊急救命治療, 他に治療法が無いなど)
- 3) 導入予定ステントの種類と評価
- 4) ステントの有効性と安全性
- 5) ステントの世界での評価状況(FDA認可の有無など)
- 6) 日本での現況(どの程度施行されているか)と将来の必要性(日本での対象患者の頻度(数)と今後の普及性など)

第2回のSGI 2008は, 再度ソウルで, 2008年10月10～11日「The Cutting Edge of Interventional Management of Gastrointestinal Bleeding」のタイトルで開催される予定である。